

# キリストの福音

「私は、キリストの福音をくまなく伝えました。」(聖書「ローマ人への手紙」15章19節)

## —聖書のことば—

「それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があり、そこにイエスの母がいた。イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれていた。ぶどう酒がなくなると、母はイエスに向かって、「ぶどう酒がありません」と言った。すると、イエスは母に言われた。「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」母は給仕の者たちに言った。「あの方が言われることは、何でもしてください。」そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、石の水がめが六つ置いてあった。それぞれ、二あるいは三メトレデス(1メトレデスは約40リットル)入りのものであった。イエスは給仕の者たちに言われた。「水がめを水でいっぱいになさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。イエスは彼らに言われた。「さあ、それを汲んで、宴会の世話役のところを持っていきなさい。」彼らは持って行った。宴会の世話役は、すでにぶどう酒になっていたその水を味見した。汲んだ給仕の者たちはそれがどこから来たのかを知っていたが、世話役は知らなかった。それで、花婿を呼んで、こう言った。「みな、初めに良いぶどう酒を出して、酔いが回っ

たころに悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒を今まで取っておきました。」イエスはこれを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現わされた。それで、弟子たちはイエスを信じた。」



(ヨハネの福音書2章1-11節)

(新改訳聖書2017より)

イエス・キリストの名から連想されることの一つに「奇跡」があります。これは、その生涯の中での最初の奇跡の記事です。

ガリラヤのカナという所で、婚礼の宴が開かれていた時のことです。主イエスも弟子たちとともに、そこに招かれていました。ところがここで、思わぬ事態が発生します。数日続くと言われる婚礼の時に、大事なものでなしの飲み物が尽きてしまったのです。主イエスの母マリアは、主イエスなら何とか打開してくれるだろうと期待しました。

しかしそれは、この方の思いとかけ離れていました。この方が人となられてこの世に来られた目的は、まったく別のところにありました。それは、人々を罪から救うために、その罪の一切を十字架によってご自分の身に負うためでした。さらに三日目に復活することで、神の子キリストであることを、公に明らかにするためだったのです。母の思いがあまりにもかけ離れているため

に「何の関係がありますか」と言われたのです。確かに、その最も大切な目的の十字架の死を果たす時は、まだ来ていません。それは、神だけがお定めになる時です。しかし、母がこの時に、そこまで思いを至らせることはできませんでした。主イエスは、それでも「あの方が言われることは、何でもしてください。」とゆだねる彼女の願いに応えようとされたのでしょう。

一つの水がめは、80 リットル以上の容量がある大きなもので、それが六つありました。給仕たちがそのことばどおり、水を縁まで満たしたところ、ただちに主イエスは、それをまったく変えてしまわれたのです。事の次第を知っていたのは、給仕たち、そして弟子たちだけでした。この奇跡のわざは、ただ人々を驚かせるために行われたものではありません。その目的は、弟子たちに「ご自分の栄光を現わす」ためでした。弟子たちは、この最初の奇跡を、主イエスの栄光の現れと見て、信じたのです。

この出来事が聖書に記されたのは、この後、それを読んだ者が、この主イエスのみわざを通して、この方こそ、神の御子、救い主キリストとして信じて、永遠のいのちを得るためです。なぜなら、生まれながらにして「罪人」とであると告げられている私たちは、そこから救われる必要があるからです。「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができない」状態にあります。「神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなった」(ローマ人への手紙 2:21)と書かれている通りです。神を離れ、何が

真実であり、何が善であり悪であるかわからなくなっているのです。「自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」(エペソ人への手紙 2:3)。

イエス・キリストの罪の身代わりの十字架だけが、罪の刑罰から解放される道です。神と和解させられ、もはや罪に定められることがなくなるための道です。ここに神のあわれみがあります。神はそのひとり子をお与えになることを通し、私たちに対する愛を表されました。イエス・キリストを信じる信仰によってのみ、私たちは救われます。滅びる命ではなく、信じて永遠のいのちを得るように、と私たちは招かれています。カナでの奇跡は、イエスご自身が、栄光ある神の子キリストであることを証しする最初のしるしとしての奇跡だったのです。

「これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである」(ヨハネ 20 章 31 節)



「カナの婚礼」カール・ブロック画

# 聖書と文学

- 15 -

## II. 三浦綾子（みうらあやこ）(7)

(1922-1999)

三浦綾子の作家としてのデビュー作であり、代表作である小説「氷点」は、新聞に連載小説として掲載されるや、たちまちのうちに評判を呼びます。この小説は、「氷点ブーム」を巻き起こしました。「笑点」というテレビ番組がありますが、このタイトルは、「氷点」をもじってつけられたものです。こんなところからも、「氷点」が当時の社会現象にまでなっていたことを知ることができます。

さて、この「氷点」のストーリーは、ある家族に起きた一つの事件をきっかけとして、進められます。医師辻口は、妻の夏枝が自分以外の男性と密会中に、3歳の娘が殺されるという不幸にみまわれます。

彼は妻を問いただすこともできないまま、内なる嫉妬と復讐心を抱いてある行動に出ます。代わりの女の子が欲しいという妻の願いにより、彼は、妻には事情を知らせずに殺人犯の娘とされる幼い女の子を引き取ります。この子は陽子と名付けられ、夏枝の愛情を受けて明るく素直に育ちます。

陽子が小学1年生になったある日、夏枝は陽子が殺人犯の娘であることを知ってしまいます。夏枝は陽子の首に手をかけようとし、かろうじて思いとどまりますが、もはや陽子に素直な愛情を注ぐことが出来なくなり、つらく当たるようになります。

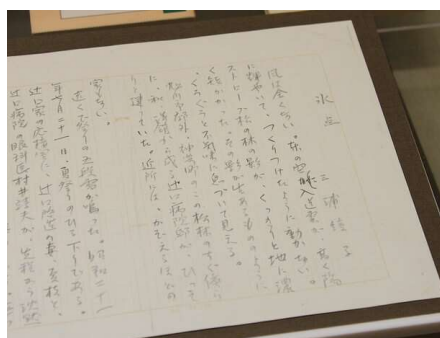
一方の陽子は、自分が辻口夫妻の奥の娘

ではないことを悟り、心に傷を負いながらも明るく生きようとします。夫妻の奥の息子である徹は、常々父母の妹に対する態度を不審に思っていました。やがて事情を知ることになります。妹を幸せにしたいと願い、大学の友人を陽子に紹介し、二人は交際を進めることになります。

しかし、陽子が高校2年生の冬、母親は陽子の出自を伝えてしまいます。陽子は人の内にあるぬぐいようのない罪の存在を思い知らされ、それはまた自分も例外ではないことに気づかされます。その厳然たる事実絶望し、彼女は翌朝自殺を図ることになります。

登場人物は、みなその心の内に、直視しがたい罪の心を抱えていますが、それはすべての人の心の内に同じように宿るものです。それが原罪と呼ばれるものです。タイトルの「氷点」もそれを表現しています。

この問題の解決は、その後「氷点」の続編としての、「続 氷点」で書かれることになるのです。



「氷点」直筆原稿

参考：「三浦綾子—文学アルバム」主婦の友社（1991）。

（次号に続きます）



# 「聖書の集い」の御案内

「信じていのちを得るために」

私たちの教会では、秋の特別企画として、「聖書の集い」を開きます。主に教会は初めてという方々に向けた集いです。この機会に、皆様お誘い合わせの上、ご来会ください。

「これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によつていのちを得るためである」

(聖書「ヨハネの福音書」20章31節)



— 2023 秋「聖書の集い」 — 参加無料

10月21日(土) 15:00~16:30 第1回

10月22日(日) 10:45~12:00 第2回(兼日曜礼拝)

14:00~15:30 第3回

場所 上田聖書バプテスト教会 講師 小川淳司(当教会牧師)

\*各集会のメッセージは、同じテーマで独立したものです。小さいお子様のお預かりもできます。

電車ご利用の場合

別所線「赤坂上」駅下車。踏切、上田原交差点信号を渡って奥。

お車ご利用の場合

上田駅より、上田橋を渡って、青木村方面に向かい、上田原交差点を右奥へ。駐車場あり。

上田聖書バプテスト教会

住所：上田市上田原八八四・七  
 問合せ：〇二六八・三・四七四一  
 牧師 小川淳司

## 定期集会のご案内

<https://uedabbc.org>

**水曜** 聖書の集い 10時~11時(一般)

聖書講座 19時~20時30分(一般)

**日曜** 日曜学校 10時~10時30分(児童・一般)

礼拝 10時45分~12時, 14時~15時(一般)

今回の集会、及びどの定期集会も参加自由です。

\*私たちは、伝統的キリスト教会です。エホバの証人、モルモン教、統一教会等で  
お困りの方は、ご連絡下さい。



教会堂